日常と災害をつなぐために
――各地の取り組みから――

岐阜大学流域圏科学研究センター准教授 / 清流の国ぎふ防災･減災センター
小　山　真　紀

1　はじめに

「日常と災害をつなぐために－各地の取り組みから－」ということでお話をさせていただきます。内田さんの最後のところ、「在留資格が何であれ」ということでしたが、私も東日本大震災の時、外国人の方がどういう状況におかれたか、ヒアリングをさせていただきました。その時に公的な支援につながるということは、自分が不法滞在状態であることが行政に知られてしまうということで、場合によっては生存の危険が高くなる（連れ戻される，国に返されることが命の危険につながる）ことがあることを知り、より困窮した人ほど支援が受けられなくなるというジレンマを考えないといけないと感じたことを改めて思い出しました。

2　熊本地震から

清水裕美子さんがまとめられた「外国人と日本人の５つの壁」として、言葉の壁、文化の壁、経験の壁、制度の壁、心の壁がありますが、これは平常時でも災害時でも両方あると思います。今回、「いつも」と「もしも」をつなぐ、「日常」と「災害」をつな

ぐということが主題ですが、日常と災害はフェーズの違いであり、日常に係わるものは災害でも全て係わります。限られた一つのカテゴリーではないのです。災害時には、困窮している人が、さらに困窮する、日常の問題が拡大されるのです。つまり、日常のちょっとした問題が、災害時には命の危険につながるほど大きい問題につながってしまう。ここがポイントになると思います。だからこそ日常のところで、いかに壁を低く、なくしていくか、取り組みをしていけるか、どうつながっていけるかというところが大事なことになります。

2016年の熊本地震における外国人の困りごとに関する話です。世界の災害分布を見ると、国によって起きやすい災害の種類が違います（図1）。色の濃さの違いが災害の違いを表していますが、国や地域によって、地震が多いところもあれば洪水が多いところもある。地震が全くないところもあるし、水害をほとんど受けないところもある。「外国人」という名称で一括りにするにはとても多様です。地震がない国から来た人は地震を知らない人もいます。ちょっと揺れただけでも死ぬほど驚く方もたくさんいます。熊本地震が起きたときも何が起きているのかわからない、何をしていいかわからない。情報は日本語ばかり、避難所の張り紙は日本語ですので、いくら有用な情報が書かれていても情報にアクセスできなくなってしまうことがありました。避難所も知らない。災害が起きた時の仕組みも国によってさまざまです。日本人だと災害が起きて住むところがなくなった方とか住めない状況の方には、避難所ができて、そこへいくとご飯が配給される、物資が配

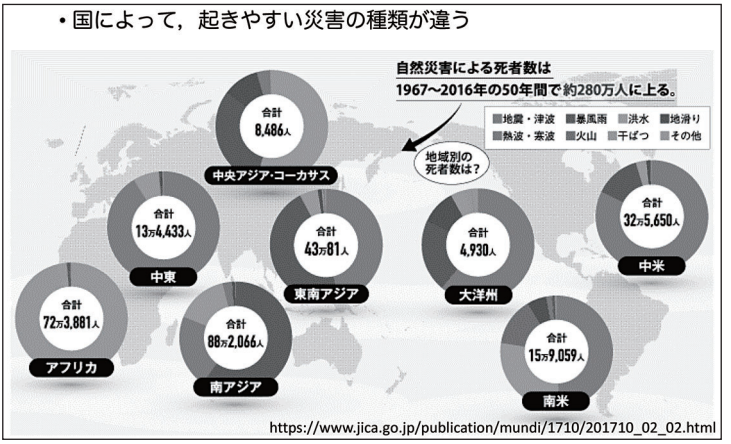


図１　世界の災害分布

給されるということを知っていますが、外国人の場合、自国ではそもそもそういう仕組みでなかったり、日本の避難所のことを知らないので、どこへいったらいいかわからない。受けられる支援が受けられない。情報が得られないことにつながっていきます。

3　岐阜県可児市の事例から

次に外国人の方々で災害を知らない方が多数いる中で防災対策をどれくらいやっているかについて、岐阜県可児市の例を見てみます。このデータは少し注意が必要で、無作為抽出で回答率 12%ほどです。行政の調査に協力しない人たちは、そもそも行政とつながっていないケースも多いです。そのため、これに回答してい

る人は行政とつながっていたり、国際交流協会とつながっていたり、地域で活動しているとか、日本人社会とのつながりがある方の割合が高いデータであると思ってください。つまり、実体はこの割合よりも割引いて考えていただく必要があると思います。図2のとおり、かなりかかわっている人でさえ、「対策は何をやっていますか？」と聞かれて「特に何もしていない」人が4割くらい。おそらく、実際には何もしていない方の割合はもっと多いと思います。図3のとおり、「参加したことのある活動はどんなものがありますか？」では「特にない」が4割。先ほど説明したとおり、回答者の偏りを考えると、自治会の行事に参加していない、子ども会やPTA活動に参加していない。イベントにも参加していな

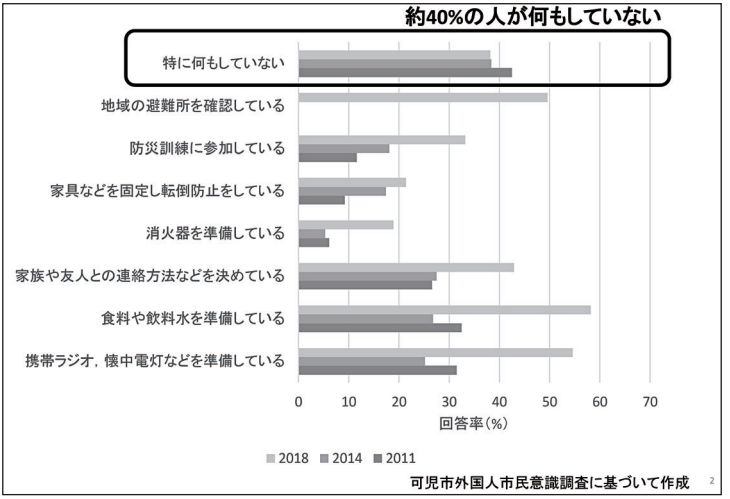


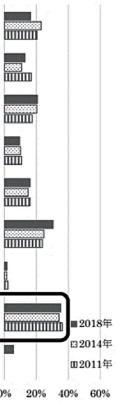
図２　外国人の防災対策（可児市の例）

い。母国人団体の会合にも参加していない。自国人同士の行事も参加していない。協会やボランティア団体にも参加していないというような人の割合は実際にはもっと多いと思います。つながっている人でさえ、30、40％が「特に参加していない」ということです。地域、母国人同士のつながり、ネットワークをもっていない方が相当数いることが想像できると思います。

その一方で、図４のとおり、「参加したい活動がありますか？」に対して「関心がない」という人は数％しかいない。さきほど参加している活動が「特にない」という回答が４割でしたが、興味がないわけではないのです。きっかけがないとか、どこでやって

3～40%の人が特に参加していない

	2018年		2014年	2011年
地域の日本人自治会の行事（お祭り、清掃活動、スポーツ大会など）	82	16.3%	22.9%	20.5%
子ども会・学校のPTA活動・保護者会など	65	12.9%	10.8%	16.8%
テレビアで行われるイベントや日本語教室など	104	20.7%	20.2%	17.4%
母国人団体の会合	48	9.5%	10.0%	10.6%
母国人同士で開催する行事(お祭りやスポーツなど)	81	16.1%	14.9%	16.1%
教会やボランティア団体などの活動	153	30.4%	24.7%	23.8%
その他	8	1.6%	1.4%	2.2%
特にない	177	35.2%	34.2%	36.3%
無回答	28	5.6%	-	-
調査数	503	100%	100%	100%

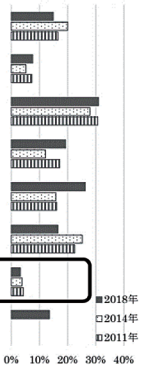


可児市外国人市民意識調査より　3

図３　参加したことある活動（可児市の例）

参加はしていないけれど，関心がないわけではない

	2018年		2014年	2011年
地域の日本人自治会の活動に参加したい	75	14.9%	20.0%	16.6%
子ども会・学校のPTA活動・保護者会 などに参加したい	38	7.6%	5.2%	7.3%
テレビアで行われるイベントや日本語教室などに参加したい	156	31.0%	27.9%	30.7%
母国人団体のグループに参加したい	97	19.3%	12.1%	17.2%
教会やボランティア団体などの活動に参加したい	132	26.2%	15.8%	16.1%
可児市のまちづくり活動に参加したい	83	16.5%	25.2%	22.5%
種類を問わずコミュニティなどの活動には興味・関心がない	16	3.2%	3.8%	4.2%
無回答	68	13.5%	-	-
調査数	503	100%	100%	100%



可児市外国人市民意識調査より　4

図４　参加したい活動（可児市の例）

いるか知らない、どんなことがあるかわからないという理由で参加していない。つまり、現状参加はしてないけれど、何らかのきっかけがあれば、この人たちもそういった活動に参加していけるのではないかということが見えてきます。

4　多文化の活動の事例から

次に国際交流協会、日本語教室、多文化の防災活動団体の方に外国人向け防災活動とその課題について調査を行った結果についてご紹介します（図５）。国際交流協会では「すべての外国人住民とつながるチャンネルがない」ということでした。国際交流協会

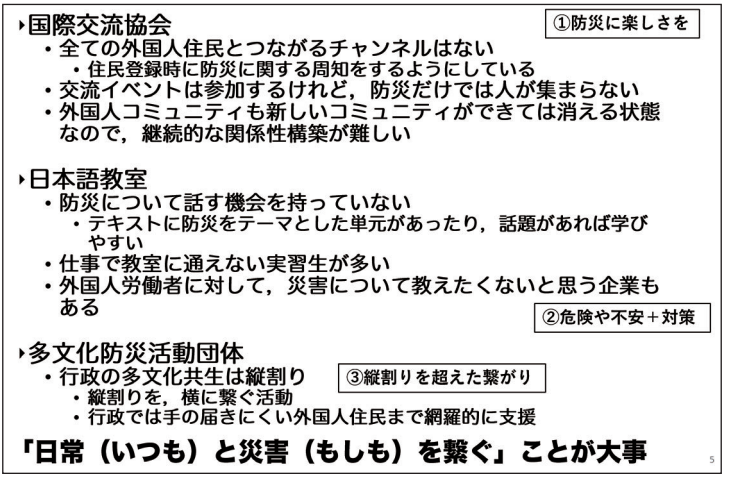


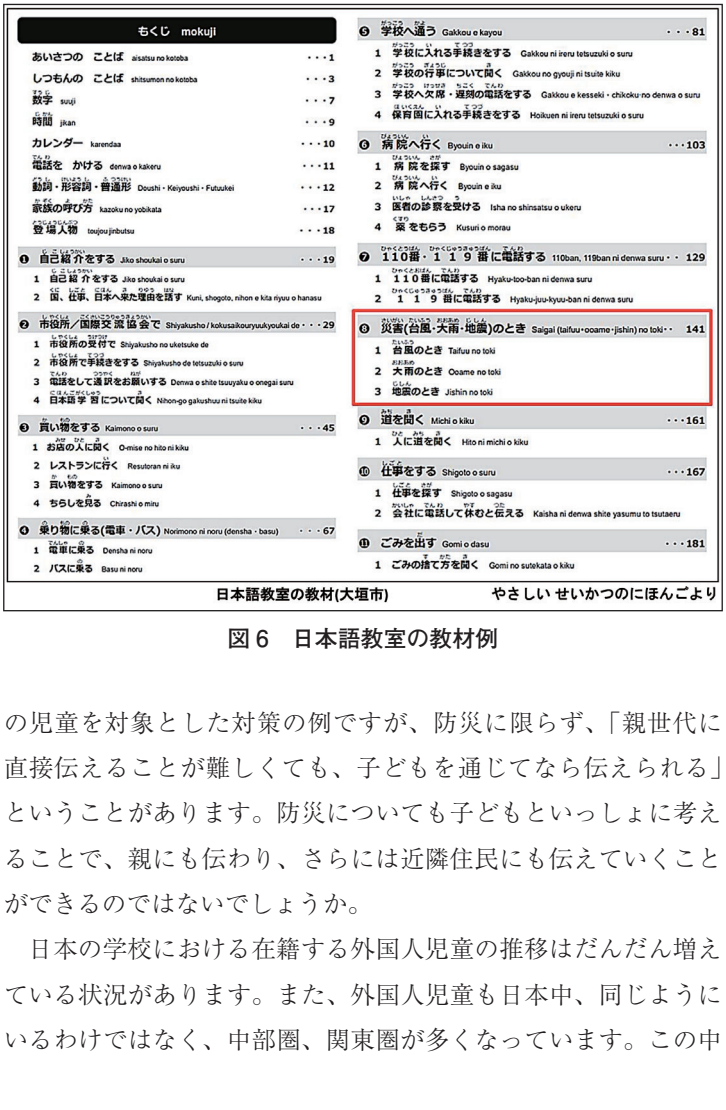
図５　ヒアリング調査から

が全外国人住民のリストをもっているわけではなく、外国人住民全員にちゃんと情報を伝えようと思うと、転居してきたときの住民登録時しか周知のチャンスがないとのことでした。伝えたい情報があったとしても、全員に漏れなく伝える手段がないのです。次に,「交流イベントは参加するが、防災活動は集まらない」ということがあります。日本語教室では、「防災について話す機会がない」という課題が指摘されました。多文化防災活動団体からは、「行政の多文化行政は縦割りなので、そこをつないでいく活動がない」ことが指摘されました。

「交流イベントは人が集まるが、防災活動には集まらない」ということからは、「防災は楽しさがないと、日常から考える場づ

くりができないのではないか」ということがいえるかも知れません。また、日本語教室で聞いたことですが、外国人の方に災害について教えたくない企業があるそうです。なぜかというと「災害があってこんな危険があるよというと、日本は危険な所だと思われて、日本に来なくなってしまうのではないか」と考える企業があるというのです。ここから、「災害について伝えるということは、危険や不安を煽っているということ」ではなく、「だから、こういう対策をするのですよ」と、対策とセットで話をしてあげることで不安を解消して災害に対応できるようにしていけるのではないかと思います。また、「縦割りを超えたつながり」については、行政のつながりだけでなく、外国人同士のネットワークというものもあり、地域の中での日本人と外国人のネットワークもあると思います。「日常の中で防災のことをいっしょに考えていける多様なつながりや仕組みづくり」が大事になってくるのではないかと思います。

さて、では、取り組みの中でどういうふうにやっているか見ていきたいと思います。「日常」と「災害」、「いつも」と「もしも」をつなぐことが大事と言いました。最初の事例は日本語教室の中で「いつも」の中に「もしも」を入れる。大垣市の日本語教室の教材で、日本語を学ぶ中で災害についても学ぶということをされています（図6）。日本語教室の教材の中で、災害、台風、大雨、地震の時、災害の情報をどうやって手に入れられるかが書いてある。このように日常の中で学べるようにすれば、日常の中で日本語を学びつつ、防災知識を得ていくこともできる。次に、外国籍



もくじ　mokuji

あいさつの　ことば　aisatsu no kotoba ・・・1
しつもんの　ことば　shitsumon no kotoba ・・・3
数字　suuji ・・・7
時間　jikan ・・・9
カレンダー　karendaa ・・・10
電話を　かける　denwa o kakeru ・・・11
動詞・形容詞・普通形　Doushi・Keiyoushi・Futuukei ・・・12
家族の呼び方　kazoku no yobikata ・・・17
登場人物　toujou jinbutsu ・・・18

❶ 自己紹介をする　Jiko shoukai o suru ・・・19
1 自己紹介をする　Jiko shoukai o suru
2 国、故郷、日本へ来た理由を話す　Kuni, shogoto, nihon e kita riyuu o hanasu

❷ 市役所／国際交流協会で　Shiyakusho / kokusaikouryuukyoukai de ・・・29
1 市役所の受付で　Shiyakusho no uketsuke de
2 市役所で手続きをする　Shiyakusho de tetsuzuki o suru
3 電話をして通訳をお願いする　Denwa o shite tsuuyaku o onegai suru
4 日本語学習について聞く　Nihon-go gakushuu ni tsuite kiku

❸ 買い物をする　Kaimono o suru ・・・45
1 お店の人に聞く　O-mise no hito ni kiku
2 レストランに行く　Resutoran ni iku
3 買い物をする　Kaimono o suru
4 ちらしを見る　Chirashi o miru

❹ 乗り物に乗る(電車・バス)　Norimono ni noru (densha・basu) ・・・67
1 電車に乗る　Densha ni noru
2 バスに乗る　Basu ni noru

❺ 学校へ通う　Gakkou e kayou ・・・81
1 学校に入れる手続きをする　Gakkou ni ireru tetsuzuki o suru
2 学校の行事について聞く　Gakkou no gyouji ni tsuite kiku
3 学校へ欠席・遅刻の電話をする　Gakkou e kesseki・chikoku no denwa o suru
4 保育園に入れる手続きをする　Hoikuen ni ireru tetsuzuki o suru

❻ 病院へ行く　Byouin e iku ・・・103
1 病院を探す　Byouin o sagasu
2 病院へ行く　Byouin e iku
3 医者の診察を受ける　Isha no shinsatsu o ukeru
4 薬をもらう　Kusuri o morau

❼ 110番・119番に電話する　110ban, 119ban ni denwa suru ・・129
1 110番に電話する　Hyaku-too-ban ni denwa suru
2 119番に電話する　Hyaku-juu-kyuu-ban ni denwa suru

❽ 災害(台風・大雨・地震)のとき　Saigai (taifuu・ooame・jishin) no toki ・・141
1 台風のとき　Taifuu no toki
2 大雨のとき　Ooame no toki
3 地震のとき　Jishin no toki

❾ 道を聞く　Michi o kiku ・・・161
1 人に道を聞く　Hito ni michi o kiku

❿ 仕事をする　Shigoto o suru ・・・167
1 仕事を探す　Shigoto o sagasu
2 会社に電話して休むと伝える　Kaisha ni denwa shite yasumu to tsutaeru

⓫ ごみを出す　Gomi o dasu ・・・181
1 ごみの捨て方を聞く　Gomi no sutekata o kiku

日本語教室の教材(大垣市)　　やさしい せいかつのにほんごより

図６　日本語教室の教材例

の児童を対象とした対策の例ですが、防災に限らず、「親世代に直接伝えることが難しくても、子どもを通じてなら伝えられる」ということがあります。防災についても子どもといっしょに考えることで、親にも伝わり、さらには近隣住民にも伝えていくことができるのではないでしょうか。

日本の学校における在籍する外国人児童の推移はだんだん増えている状況があります。また、外国人児童も日本中、同じようにいるわけではなく、中部圏、関東圏が多くなっています。この中

でも特に外国人児童の多い、知立市の小学校では「昭和まもりんピック」という取り組みをやっています（https://www.city.chiryu.aichi.jp/soshiki/fukushikodomo/fukushi/gyomu/1488759085294.html）。第一部「まもりんピック」、第二部「学びんピック」、第三部「食べりんピック」、第四部「泊りんピック」と、楽しみながら防災を学ぶ大規模なイベントで、600 人もの地域住民が参加しています。このイベントで防災の楽しさ、縦割りを越えてつながる取り組みを行っています。

多文化防災ネットワーク、愛知、名古屋の例では、多文化支援をしている団体と防災活動している団体が集ってネットワークを組んで多文化防災の取り組みをされています。実際に取水期、雨がひどい時には、Facebook で多言語で情報提供する活動も行っています（https://www.facebook.com/saigainet.aichi.nagoya/）。

5　岐阜県内の事例から

このように,「危険や不安だけを煽るのではなく、対策といっしょにあわせて学ぶ場をつくる」、「防災に楽しさを」、「縦割りをなくしていく取り組み」をしていけるといいと思います。地域の防災リーダー育成は、全国的に、日本人向けにはたくさんされていますが、外国人の防災リーダーを育成しようという取り組みも拡がりつつあります。これは岐阜県の例ですが、外国人防災リーダーの育成というと外国人だけを対象にして集って勉強するということが多いのですが、ここでは日本人の防災リーダーにも参加

していただき、意見交換をしています（図 7）。この図の左の写真は日本人の防災リーダーの方がつくった、地震時家具転倒防止教材のミニチュアの家具模型で，日本人防災リーダーの方が外国人防災リーダーの方にレクチャーしているところです。日本人と外国人の防災リーダーが一緒に参加し，顔の見える関係を作れるような取り組みをすることでネットワークづくり、縦割りを超えたつながりのための機会をつくっています。

次に留学生対象の取り組みです（図 8）。これは岐阜市国際交流協会と岐阜大学がいっしょに行った外国人向け避難所開設訓練などの防災プログラムの取り組みです。岐阜大学は指定避難所になっており、かつ、学内に留学生も大勢います。つまり、災害が

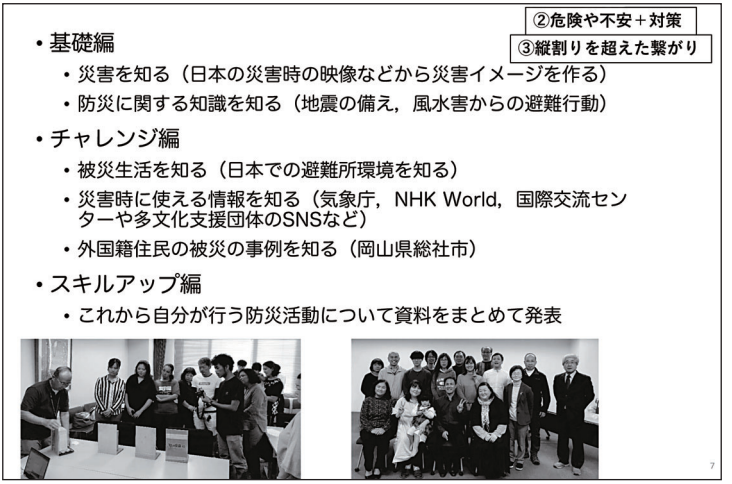


図 7　外国人防災リーダー育成（岐阜県の例）

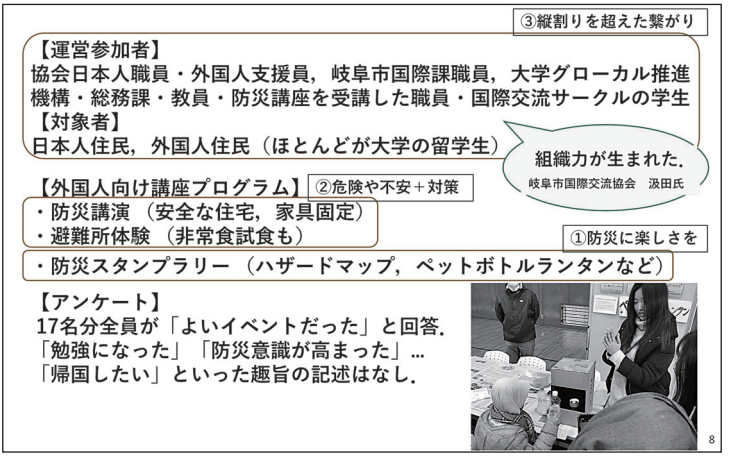


図８　留学生対象の防災の取り組み（岐阜市国際交流協会・岐阜大学の例）

起きると岐阜市内で最も外国人が多く避難してくる避難所の一つが岐阜大学となることは確実でしょう。そのため、岐阜大学でも外国人向けの避難所開設訓練の必要性は高かったのですが、この取り組みをするまでは実施できていませんでした。大学の留学生を支援する部局のスタッフと国際交流協会のスタッフ、国際交流サークルのメンバー、防災サークルのメンバーが参加してプログラムを実施しました。組織を越えて多様な人がいっしょに参加することで、縦割りを超えたつながりづくりができました。さらに、防災講座のセクションでは、危険を煽るだけでなく、対策をいっしょに考える、具体的な対策まで踏み込んで伝えるということを行いました。そして、防災スタンプラリーは、防災教育に楽しさを感じられるものとしました。このように、上述した３つの提案

を全て反映させたイベントです。

さて、最初に５つの壁の話をしましたが、壁を取り払っていくことは、日常だけでなく災害時にも必要です。「日常」と「災害」を行きつ、戻りつ、「災害を見越した日常」という視点も持ちながら壁を取り払っていく。防災だけ考える対策ではなく、壁を超えていく、日常の中で防災の知識を入れていく。そういう活動が必要になってくるだろうと思います。

6　おわりに

最後になりますが、外国人防災を進める上で大事なことです（図９）。危険や不安を煽るだけではなく、丁寧に知らせることで

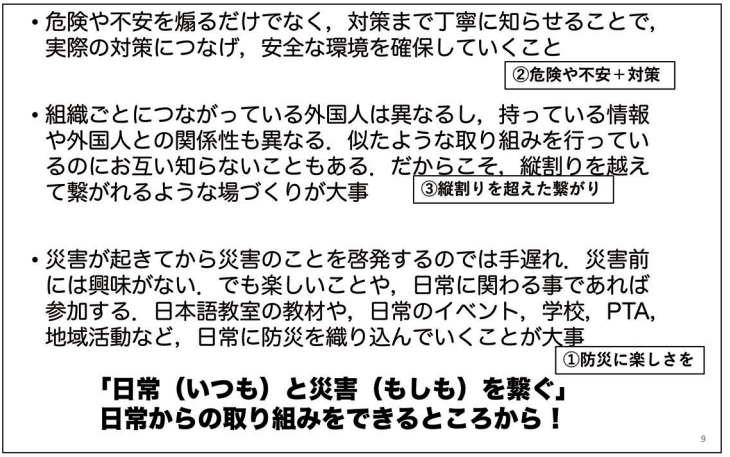
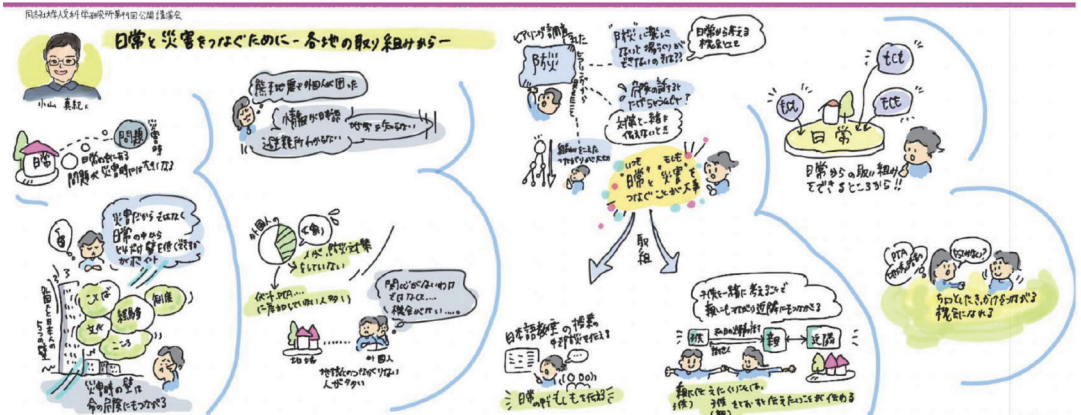


図９　外国人防災を進める上で大事なこと

実際の対策につなげて安全な環境を確保していくことが大事ということ。組織ごとにつながっている外国人は異なるし、日本の支援組織もフィリピンの人を支援する人、イスラム教関係の人を支援する人、つながっている外国人が違ったりします。もっている情報、外国人との関係性も異なっています。似たような取り組みを行っている団体でも、お互いにやっていることを知らなかったりします。だからこそ壁を超えてつながる場をつくることが大事です。つながる場ができ、いっしょにやっている人がつながっていくことで、さらに大きいつながりにもなる。外国人のセクターを超え、組織のセクターを超えて互いに知らなかったこと、情報共有できていなかったこと、気づいていなかったことも相互に気づくことができるようになると、できることが増えていきます。災害が起きてから災害のことを啓発するのでは手遅れなので、災害前に考えないといけないのですが、災害前には防災に興味がない。こうなると日常の防災活動が進まないということになるのですが、防災に興味がなくても、楽しいこととか日常で必要なことであれば参加したくなりますよね。だからこそ日本語教室の教材、日常のイベント、学校やPTAなどの日常の活動に防災を入れていくことが大事なのです。可児市のアンケートでも、日常の活動に参加していない外国人の方がたくさんいましたが、参加したくないというわけではありませんでした。ちょっとしたきっかけ、つながる機会があればどんどん誘っていただければいいのではないかと思っています。「いつも」の日常と「もしも」の災害をつなぐ、日常の、できるところから始めていただきたいと思います。

事前のアンケートの中で「外国人の防災をどういうふうに考えていったらいいか」という問い合わせをいただいていますが、「こうすればいい」という厳密な一つの明確な解はありません。だからこそ、今参加されている方も含めていっしょに考えていきたいと思います。以上です。ありがとうございました。



【グラレコ：小山真紀先生の発表】